
本ではなく君の名を

中村蛸央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本ではなく君の名を

【Nコード】

N5563D

【作者名】

中村蛸央

【あらすじ】

オレ、三神雪哉は、高校3年生にして人生初の委員長になった。しかも、図書委員長。本とは無縁だった生活が一変した。

「クロイスミレ。」

「またお馴染みのキャッチフレーズ？」

「失礼ね。貴方が聞いたのよ」

放課後。

俺は図書委員長になっていた。

別に進んでなかったわけじゃないし、まさか自分になってしまっなんて今朝の俺は思いもなかった。

半日先のことで未来は未来だ。

俺は予言者じゃないから分かるわけないんだけど。

そして今、俺は図書室にいる。これから卒業まで毎日通い詰めかと思うとちょっと鬱になる。自慢じゃないが、俺は今まで本とは無縁の生活を送ってきた。

そんな俺に委員長なんか勤まるのかと、自分自身不安だった。

俺が人生初の委員長になって2週間がすぎた。

自分でも驚いているが、この2週間ずっと真面目に仕事をこなしている。

まあ、真面目といっても放課後はとてつもない睡魔が襲ってくるから、誘惑に弱いおれは目蓋を閉じてしまうことが度々ある。

木曜日を除いては。

今日、木曜日はあの子が来る日だ。

ホームルームが終わると同時に図書室へ向かう。

ドウシタnda三神雪哉「オ前ラシクモナイ

頭の中で自分に問う。

扉を開けると彼女は既に来ていた。

一息ついてから話し掛ける。

「早いだね」

「ホームルームさぼったから」

彼女は読んでる本から目を離さずに、そう応えた。

「あ、サボったりするんだ」

「この本読みたかったの。言っておくけど私、優等生なんかじゃないから」

「そうみたいだね」

「なんで笑うのよ」

「いや、良いんじゃないか。優等生じゃなくても。それより、その本の名は？」

彼女がフキゲンになりそうだったので話をそらした。

「ああ。そうね、時間を頂戴。あと少しで読み終わるから」
「そうだな。オレ仕事やつとくから」

返事はない。

もう本の世界に入ってしまったっている。

苦笑しながら、俺は図書委員の仕事を始めた。
下校時間まであと30分というところで、ようやく仕事が付いた。
小走りに彼女が居たところに戻ると、彼女はもう本を閉じていた。

「悪い」

「どういたしまして、委員長さん。仕事は終わった？」

「ああ。本は読み終わったみたいだな」

「ええ」

彼女は先ほど読んでいた本を手にとって言った。

この本は“ハルのイズミに浮かんだケモノ”よ」

彼女が今言ったのは、本のタイトルではなく、

「へえ。その意味は？」

彼女が考えた、本の副題、キャッチフレーズだ。

「イズミが主人公の名前。ハルはその弟。ハルとイズミは、英語で

両方ともスプリングね。私、将来子供を生んで双子だったら、ハルとイズミって名付けようかしら」

正直どうコメントして良いのか分からない。

「やっぱりこの作者の話は良いわ。あなたも読んでみる？」

この2週間で俺は2冊本を読んだ。今週も1冊読むとするか。

「そうだな。中身が気になるし読んでみるよ」

「そういえば、先週のはどうだった？」

本をろくに読まない俺がこうして1週間に1冊本を読むようになったのは、彼女のお陰だ。

「ああ。昨日やっと読み終わったよ。オレ1冊読むのに1週間かかるらしい。地理は苦手だから、いろんな地名が出てきて良く分からなかった」

「確かに、場所がところ変わるけど、そこが面白いんじゃないかしら。“ソアラに乗ったフリールポライター”はお気に召さなかったよね」

「そのキャッチフレーズはないんじゃない？たしか、あれってシリーズものじゃなかったっけ」

火サスのなドラマだったな、あれは。

「そうよ。なんだ、知ってるんじゃない。ああ、テレビで時々やってるから」

彼女は少し早口になった。

「あれは良くないわ。だってあの俳優は浅見さんって感じじゃないもの。じゃあ誰が合っているかと聞かれても困るのだけれど」

勝手に話してしまった。

この子は本の事となると周囲が目に入らないようだ。俺が黙ってしまつたのに全く気付いていない。

彼女はずっと見ていても厭きないなど、ふと思った。彼女の外見が人並み以上だということよりも、仕草の一つ一つが俺の気を引く。俺の方を見ない、ただそれだけのことで凄く不安になる。

彼女がまだ話をしている途中だというのに、俺はそれを遮った。

「もう下校時刻になる。この本は借りて良いんだね？」

「え、もうそんな時間？ああ、読んだら感想を聞かせて。来週の木曜に」

「あ、分かった」

来週もまた来る。なんか妙に嬉しい。

「それじゃあ、さようなら」

次の日の放課後、俺は図書室のカウンターで借りた本を読んでいた。金曜日の俺の仕事は本の貸し出しだけなのだが、何しろ人が多い。カードに押す判子を片手に本を読んでいた。

図書委員になるまで、図書室にこんな人が来るなんて知らなかった。それにしても、金曜日は本を借りに来る人が一段と多い。週末

だからか？

たしか木曜日は男の割合が高いな。彼女が来る日というのが少なからず関係しているのだろう。

いろいろ考えていた所為か、時計の針はいつの間にか下校時刻間近を指していた。

周りを見渡すと机に座っている一人を除いて誰も居なくなっていた。体が勝手に机の方へと動きだす。

あの姿は。

彼女は昨日と同じ場所に座り、本を読んでいた。俺の影で気付いたのだろう。顔を上げて言った。

「お疲れ様、三神委員長。」

彼女は俺の名前を知っていた。

「何で？昨日は木曜日に来るって」
「今日はその木曜日ではない。」

「あら、金曜日に図書室に来てはいけないのかしら」

いや、そんなことない。

そうじゃなくて

「そうじゃなくて」

「昨日、木曜に感想を聞かせて、とは言っただけ。それまで此処に来ないとは言ってないわ」

それは屁理屈だ。

「それに

彼女は振り向いて、俺の目を見た。

それに、貴方に感想を聞いて欲しくて」

彼女の頬が紅くなっているのは、西日のせいではなくて、

「名前は？」

彼女に尋ねた。

「ええと、これは昨日読んでいたのと同じ作者なの。マイナーだけれど映画にもなっていて。それで名前は“大人に成り切れていない

今日は木曜日ではない。

いつもとは違う話をしよう。

本ではなくて、

「本ではなく、君の名を」

明日は土曜日。図書委員の仕事は無いけれど、此処に来ても良いかもしれない。

俺は予言者ではないが、明日も彼女は此処へ来る。そんな予感がした。

（後書き）

「黒い井戸に花の莖」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5563d/>

本ではなく君の名を

2010年12月10日02時41分発行